ゼネコン技術者座談会　土木篇

「プロフェッショナルへと進む道」

千々和辰訓さん × 油谷彬博さん× 長谷川駿さん

きっかけは三者三様

長谷川　父が建設業で働いていて、幼い頃から土木現場になじみがありました。その背中を見て育つ中で、自然と「僕もやりたいな」という思いが芽生え、自然な流れで今に至っています。出身が港町で、港湾施設の建設が身近にあったことも大きいですね。人の暮らしに直結するインフラ整備にとても魅力を感じていました。

「どんな人の言葉にも
耳を傾けよ」

CHIJIWA TATSUNORI
千々和辰訓さん

2007年入社。
高速道路のインターチェンジ、石油備蓄地下トンネルなどの現場を経験した後、本社の技術研究所に勤務し、現在は本社土木設計部でトンネル設計に携わる。
山口大学大学院理工学研究科
環境共生工学専攻修士課程修了。

「アンテナを張り
視野広げろ」

YUTANI AKIHIRO
油谷彬博さん

2005年入社。
北陸新幹線や首都高速道路のトンネル現場などを経験し、2009年から東急東横線の地下化工事の現場で勤務。
中央大学理工学部土木工学科卒。

「大志を抱いて
業界へ来い」

HASEGAWA SYUN
長谷川駿さん

2009年入社。
埋立処分場などの港湾工事の施工管理を担当し、現在は民間企業の工場内で桟橋補修工事などを手掛ける。
関東学院大学大学院工学研究科修了。

「地球というキャンバスに夢を描く仕事ーは本当だった」

油谷　ものづくりが好きで、その最前線で社会に貢献できる仕事と思い、ゼネコンを選びました。インターンシップで建設現場を見て、「これだ!」と確信を持ったんです。オタクというほどではありませんが、鉄道も好きで、社会の人の足になる鉄道施設をつくりたいと思い、今の会社に入りました。プライベートでやっているサッカーとも共通するのですが、いろいろな人と一緒に仕事ができることが、建設会社の魅力ですね。

千々和　もともと土木に強い思いがあったわけでなく、正直、建築家になりたかったんです（笑）。土木の道に進もうと決めた時も、ただ漠然と設計をやりたいと思っていましたが、大学の研究室で今の会社の先輩と共同研究をする機会があって、次第に施工もやってみたいという思いが強くなり、ゼネコンを第1志望にしました。施工を経験してから設計をやるというキャリアプランを思い描くことができたことが、今の会社を選んだ理由です。

毎日が勝負の場

長谷川　今は、民間企業の工場内で、桟橋補修工事の施工管理を主に手掛けています。この企業からはほかにもいろいろな工事を発注いただいていて、発注者との折衝から見積もり・積算も含めて、全部1人で行っています。悪戦苦闘の連続ですが、大変だからこそ、やりがいがありますね。入社4年目で、こんなに責任を与えてもらってよいのかと最初は感じましたが、期待されている証拠だと思い込んでやっています（笑）。

油谷　私は、東急東横線と東京メトロ・副都心線との相互直通運転へ向けた工事を担当しています。発注者とも毎日打ち合わせをしながら、現場の品質・安全・工程管理などを行っています。東京・渋谷のど真ん中で仕事をしているので苦情もありますが、周辺に対してしっかり配慮してコミュニケーションをとるよう心掛けています。社会人になるまでは、土木の仕事は大ざっぱにどんどん進めていくイメージでしたが、実際は法令や仕様書のような細部にわたる決まりもあり、とても緻密に作業を進めています。

千々和　ゼネコンの土木設計部は、現場を支える「縁の下の力持ち」だと実感します。業務は現場支援が中心で、品質、安全、工程、環境など、トンネルを掘り進めていく上で発生する現場の「困った」を現場の方々と一緒になって検討し解決します。今は、あるトンネル工事の設計変更に関連した計画づくりを担当しています。この工事はトンネル掘削前に、地上にある既設の道路と水路を付け替える必要があり、それらの線形や形状を決めた後、トンネル構造を再検討しなければなりません。机上の空論にならないように、現場をよく理解し、“活きた設計”を心掛けています。

最前線だからこその感動

長谷川　自分が関わった構造物が完成した時には大きな喜びを感じますね。同時に、安堵感がわき上がってきて、苦労がフラッシュバックしてきます。たくさんの職人さんたちと一つのものをつくり上げていくプロセスに、建設会社の醍醐味とやりがいがありますね。つくった桟橋に最初の船が入ってきた時は感動します。

油谷　私も、ものが出来上がっていくことに、大きなやりがいを感じています。首都高速道路の山手トンネルを手掛けましたが、車で走っている時に、「自分がここをつくったんだ」と思うと気分も良いですね。また、今いる鉄道工事の現場は、終電が行った後の夜間にしか仕事ができません。始発を遅らせるわけにはいきませんから、綿密に計画を立ててリスクも検証しながら進めています。だから、無事に作業が完了し、始発電車が通ったときの感慨はひとしおです。これは、なかなか経験できません。技術者冥利に尽きます。

千々和　私は、初めて現場に赴任した際、追加工事の河川改修を任されました。入社3カ月位だったので、何をやるにもドキドキの連続でしたが、無事工事が終わって水が流れた瞬間は“感動”と“達成感”で満たされ“やりがい”を実感しました。ものづくりの最前線で働いている自分って格好いい、とも思っちゃいました（笑）。

設計の立場で言えば、自分の思いや考えがダイレクトに反映されるため、“やりがい”と同時に“責任の重さ”を実感しますね。今の業務で計画している道路や水路やトンネルも、自分の思いや考えがたくさんつまっています。不安もありますが、完成の瞬間が今から本当に楽しみです。

「『あの人に聞けば何でも分かる』。そんな先輩に近付きたい」

目指せ！『情熱大陸』

油谷　「あの人に聞けば何でも分かる」という方が、私の会社にいます。そういう鉄道工事のスペシャリストに自分も近付きたいですね。そのためには知識や経験が必要ですから、忙しい中でも日々の勉強を大事にしています。マラソンをやっているのですが、ゴールしたら終わりではありません。次の大会でも良い結果を出そうと思うところや、ペース配分や忍耐力が大切だという点では、仕事もマラソンも似ているところがあると考えています。

長谷川　多様化する社会のニーズに柔軟に対応できる港湾工事のプロになりたいですね。例えば、もしも東京五輪が実現すれば、東京湾の周辺が活気づくはずです。そうなった時に力を発揮できるよう日々勉強しつつ、スキルを上げて、成長していきたいと思っています。日常で気を付けていることは、仕事とプライベートを完全に切り分けることですね。プライベートに仕事を持ち込まないようにしていますし、逆に、玄関を出たら仕事に切り替えています。

千々和　私の目標も、トンネルのエキスパートです。誰にも負けたくないですし、社内のいろいろな方から「千々和に頼めば何とかしてくれる」と信頼される人材になりたいですね。初めてのことでも、「無理です」とは言わずに、「やったことはありませんが、勉強しながらやってみます」と言うように心掛けています。魅力的で情熱的な人間として成長し、テレビ番組の『情熱大陸』に出る。それが夢です。

油谷、長谷川　情熱大陸は私も出たい！（笑）

「国益を守る誇りある仕事」

自ら動き道を拓け

千々和　常に積極的にものを聞く、どんな人の言葉でも聞いてみる、そうしたスタンスが大事です。私自身、もともと建築をやりたかったので、子供の頃に思い描いていた自分像と今とでは違いますが、後悔していません。きっかけは、学生時代に教授から聞いた「オンリーワンの研究をやるんだ」という一言でした。その言葉を聞いてトンネル研究室に入り、今の会社と共同研究をして、その縁で入社しました。あの一言がなかったら、まったく違った道を選んでいたかも。何がきっかけになるかは分かりませんから、自らチャンスをつかみにいってほしいですね。

油谷　学生の方には、自らアンテナを張って視野を広げていってほしいですね。就職活動について言えば、インターネットの情報や会社の知名度などにとらわれずに、実際にその会社の方に会って話を聞くことが一番です。私自身、母校のリクルーターをやっていて今週も学生にお会いしたばかりなのですが、OB訪問は大歓迎ですよ。良い部分も言えるし、きつい部分もきちんと伝えて、「それでも受けます」と言っていただけると本当に嬉しいです。

長谷川　積極的に自分から動くことが最も大切ですね。私も、自分からお願いしていろんな現場を見せていただきました。就職活動中は、周りがライバルですが、入ってからは仲間です。同期や先輩、後輩を本当に大事にしてほしいですね。ゼネコンや建設業界というと、悪いイメージがあるかもしれませんが、大きく見れば国益を守る仕事であり、私は、本当に誇りを持ってやっています。一緒にやろうという大きな志を持って入ってきてくれれば大歓迎です。

千々和　つくる“もの”の寿命が長いことが建設業の特色です。例えば、携帯電話など移り変わりが早いですよね。でも、トンネルやダム、港湾はずっと残ります。就職活動の時に、面接官への殺し文句を考えていました。ゼネコンの仕事は、「地球というキャンバスに夢を描く仕事」だと。結局、言えなかったのですが（笑）、本当にその通りだと思っています。本音のところではいろいろ大変なことはありますけれど、それくらい素晴らしい仕事で、大きな魅力があります。学生の方には、そう伝えたいですね。